

アナンダ・グループ旅行の特徴とねらい

さて、この「アナンダ・グループ旅行の特徴とねらい」を是非ともよく読んで、アナンダの旅行にご参加下さい。

(1) このグループ旅行のねらいは、今の自分の暮らしの中で使えるものを作りに行き、その自作を背負って帰る事です。参加者のほとんど全員が、自分の手でもの作りをする人達です。従って、旅行業者は航空券手配を頼むだけで、全て、インドとの長い付き合いで築かれたアナンダの個人的なつながりだけでこの旅行は構成されています。インドの村に、今も生きて居る伝統的な職人達に、その物作りを習いながら物を作るという事を通して人の心が通じ合う。アナンダのグループはこの感動がわかる人達なので、多分、観光業者には不思議な人達に見えて、・・・近くに世界遺産が有ると言うのに、見向きもしないで、村で手を汚して木版を捺しているなんて・・・と、彼らは思っているでしょう。

(2) この旅は、バグルー村（植物染料、捺染）と、カラデラ村（泥防染、浸け染）という歴史ある木版更紗の村の染め工房を、職人ごと、二日ずつ、計四日借り切って、皆さんが家で使うモノを好きなだけ作って来る旅です。観光は、やらせ、見せ物で、その背後にある思想は「王様の権威」と「金儲け」なので、インド文化を誤解します。この旅行では村人、職人達の暮らしに接し、しかも手で物作りの交流なので、意外にも言語なしで多くの事が通じ合う、とても楽しい旅です。時に私達の料理人が村の野菜市場で食材を買う時にも、野菜市場の奥までついて行くと、初めて見る野菜やくだもの、人々の間を自由に歩いている牛や山羊やブタの親子などに驚いたり、フリーの日には希望者はベジタリアン料理を習ったり、ヨガやオイルマッサージなど。観光は無しとは言え、自分を大事にする国なので、何でも希望があればアナンダに言って下さい。観光したい人には友人のガイドを付けてあげられます。

(3) バグルー村とカラデラ村の染めの他に、とても感じの良いイスラームの染め屋の家族の指導で絞り染め。と、午後はそこの奥さんや娘さん達にイスラームの日常料理を習います。暮らしの中に入れば、イスラームは女が圧迫されているという印象は完全に消えて、どこの国でも家族はあたたかく、女房は強い。と言う事がすぐに分かります。それから、バンスコー村のラグ織りの工房に一日行って、自分のラグをデザインして織って来ます。この織りの家族はジェーンさん一家、つまり、心の優しい、蚊も殺さぬ徹底的不殺生のジャイナ教徒の家族です。村のジャイナ寺院も見に行けます。手の遅いヒトは数センチしか織れないけど、職人が横に付いてく

れるので、次の日にはあなたの指示通り(?)の模様到最后まで織り上げて、ホテルに届けてくれます。

二日通して木版プリントをしに行くバグルー村と、カラデラ村がこのグループ旅行で自分の作品作りの中心になりますので、参加者は自分の家のテーブルクロスやベッドカバー、カーテン、また自分の服地、自分のTシャツやショールなど持って行っても染められます。昔からの更紗模様をイメージして、自分が使える物をいっぱい染めるつもりで、作りたい物を考えて行きましょう。(もし、自分の図案の木版が欲しい人は前もってアナンダに連絡下さい。木版屋に頼めます)欲張って計画して行きましょう。

壁一面にたくさん並んでいる木版の中から好きな版を選んでミロバランで下地染めた布に伝統的な黒、赤、茶の三色が擦せて(実は、色を擦しているのではなく鉄媒染、アルミ媒染、茶はタンニン系の何かを擦している)それを次の日に、アリザリン(茜の色素)液で、低温(80度C以下)で煮染めして、三色一度に発色させます。カラデラ村は、泥で防染しての浸け染め。前日に自分が擦したのも防染で、浸け染を加えられます。感じの良い古い村の染め屋です。

技術もだけど、現地の職人達の人柄に、こちらも作る人として対等に接することができるのが面白いです。

(4) 一日だけ、ジャイプールから約一時間ほど半砂漠の道を走って造形作家のビレンドラと言う友人宅に行きます。アトリエは半砂漠の平原の素晴らしい風景の中にあります。彼が近くの町や、村の織る人や木工細工、革細工などの職人の家に連れて行ってくれます。気に入った細工があったら自分のサイズで注文出来たりします。希望者は彼のアトリエ兼住居に一泊もできます。西洋トイレ、ホットシャワーを設備してあります。

(5) アナンダは皆さんを一人でも多くインドに連れて行って体感してもらいたいものが、実は有るのです。その、手作りの暮らしから、西洋とも日本とも、根底の違いを感じる何か、これを楽しんでもらいたい。つまり、観光地ではなく、日常の人の暮らしに接すると感じるのですが、それは、多分、日本が高精度の機械生産の国として社会がきちり出来あがっているのに対して、インドは自分で生きる、手作り思想の国と言う感じ。それもあつし、地平線に沈む太陽や、羊の群れが遊牧民に引かれて遠くに行く風景、大自然の中の淡々とした農民のインド哲学的な生き方などに感動したり、また、町の大通りで牛、やぎ、犬、イノブタの親子や猿の一家などがつながれもせずに、人間と、まるで同等の生きる権利を持っているかのように生きて居る風景。命を排除しないこの人々の生き方の不思議さに感動したり、等々するのですが、それらも含めて、それ以上に、感じ方は皆さんいろいろですが、言葉では言えない深いものが見えて来るでしょう。インドのそれが優れているとか、正しいとか言う気は全く有りませんが、皆が生きて居る日本の空間には、そのちょうど反対、異質を排して整頓する几帳面な日本人という一面が、色濃く有るので、日本の子供達はとても厳しい環境で生きて居る。その中で、当然、不登校がとても増えて、この社会の未来に不安を感じます。これは現場に立たなければ説明しても

ダメという感じです。インドに見られる古代から続くその流れは、日本にとって、多分、救いとなる大きなヒントが詰まって居ると思います。

日本がまだ石器時代だった頃、インド亜大陸には上下水道が完備した、都市国家が有った。この永い歴史に多くの民族の多様な人々が移り住み、お互いに戦わずにうまくやって行く工夫の歴史、他者をそのまま認めて互いに責めない、排除しない。この 赦しの文化 は、争いを避けて暮らす何千年もの、その知恵の蓄積。ここには地球上から戦争を無くすためのヒントが、多分、潜んでいます。非暴力、徹底抵抗で、人を殺す武器は使わず、あの賢い大英帝国を参ったと言わせて、独立を勝ち取った、あの、マハトマガンディーの思想はインドの誉れどころでなく、多分、人類に進化をもたらす偉大な思想に違いないのです。



(株) アナンダ 西岡秀樹